

聖バジリオ修道会の形成と展開

—ハンガリーの場合を中心に—

A Nagy Szent Bazil Rend kialakulása és fejlődése:
különös figyelemmel a magyarországi tartományra

秋山 学

AKIYAMA Manabu

A Nagy Szent Bazil Rend, az egyetlen görög katolikus szerzetesrend, megőrzi a bizánci rítust és a római pápához hűségeseget. E rendből származott sok görög katolikus püspök a breszti unió után (1596). Közülük e tanulmányban csak következő püspökökkel foglalkoztam: Bizánczy Gennadius György munkácsi püspök, Dudás Miklós hajdúdorogi püspök, Josif Veliamin Rutskyj galíciai metropolita, Szent Jozafát Kuncevic polocki érsek, Parthén Péter munkácsi püspök, Andrej Septickij galíciai metropolita. Egyébként, boldog Gojdics Pál eperjesi püspök is természetesen vértanúként nagyon tisztelendő, de vele másik cikkben foglalkoztam. E tanulmányban szeretném megvizsgálni azt, hogyan hangolták össze a szertartási imarendjüket és a tevékenységüket a baziliták ill. a görög katolikus hívek, ezeknek a püspököknek a vezetése alatt.

Tehát e tanulmány a következő fejezetekből áll: 0. előszó 1. A jelenlegi Bazilita rend körülményei 2. A Nagy Szent Bazil Rendi Nővérek mai tevékenységei 3. Máriapócs és a baziliták (1) – Bizánczy Gennadius György munkácsi püspök 4. Máriapócs és a baziliták (2) – Dudás Miklós hajdúdorogi püspök 5. A Nagy Szent Bazil Rend születése – Josif Veliamin Rutskyj galíciai metropolita és Szent Jozafát Kuncevic polocki érsek 6. Az ungvári unió Magyarországon (1646) és Parthén Péter munkácsi püspök 7. A Nagy Szent Bazil Rend fejlődése és küzdelme – Andrej Septickij galíciai metropolita 8. A középkori kereszténység missziója az ukrán-ruszinok területén és a kijevi ruszin barlang-kolostor akkori szerepe : A baziliták eredete 9. Összegzés: A baziliták jelentősége a keleti rítusú kereszténységben.

A Nagy Szent Bazil Rend, illetve a Baziliták (OSBM) igazi fontos szerepet töltek be a bizánci rítusú keresztények számára. A breszti unió után nemsokára Josif Veliamin Rutskyj metropolita és Szent Jozafát Kuncevic érsek megalapították e rendet. Bizánczy Gennadius György munkácsi apostoli vikárius és a bazilita szerzetesek főelőjárója, megkezdte saját megtakarított pénzéből a máriapócsi

kegytemplom építését (1713) az Istenszülő kegyképének első könnyezése után (1696). Dudás Miklós hajdúdorogi megyéspüspök letelepíti Máriapócsra a bazilita nővéreket (1935), megalapítja a görög katolikus szemináriumot (1950), először végzi teljes egészében magyar nyelven a görög katolikus Szent Liturgiát a Vatikánban (1965). Parthén Péter munkácsi püspök, az Unió (1646) buzgó híve, akit a néhai Taraszovics Bazil püspök (1651) utódjaként választották püspökké, oldotta meg az akkori nehéz körülményt, amelyet a püspök hiánya okozott. Andrej Septickij galíciai metropolita 1909-ben a Rutszkij által már átdolgozott konstitúciók segítségével ismét egységesítette a bazilita monostorok életét, a két világháború előtti és közötti nehéz körülmény ellenére tevékenykedve.

A jelenlegi bizánci rítus szerkezete valószínűleg a 11. századi kijevi barlang kolostorban gyakorolt szertartásból keletkezett, amely a konstantinápolyi Sztudiosz kolostorban használt 9. századi istentisztelet előírásába tér vissza. A bazilita szerzetesek, az ősi egyházatyák lelki örökségét átörökítve, őrizik meg a bizánci rítusú élet és szertartás eredeti alakját. Az ő mai jelentőségük valószínűleg az, hogy az első keresztények közösségének tükreként apostolkodnak a jelenlegi világban.

序.

筆者は2005年度の「筑波大学国際連携プロジェクト（長期派遣）」において、「ハンガリーにおける古代学の展開と宗教性の関係をめぐる研究」と題する在外研究に従事して以降、ビザンティン典礼に従う同国ギリシア・カトリック教会の方々との交流を続けている¹。2008年の春は復活祭が早く訪れる年だったこともあって、3月下旬よりハンガリーに滞在し、ビザンティン典礼による復活祭期間を体験することができた。ビザンティン典礼では、復活祭の日曜日から1週間を「光の週」と呼び、式次第上、曜日の交替・夕と昼の交替も背後に退くほどに「復活の光」一色に染められるかたちでこの週の典礼が進められる²。この期間中、ハンガリーの巡礼地として極めて著名な北東部のマリアポーチを再訪し³、聖バジリオ女子修道会修道院の方々とは親しく接する機会を得た。同村は北東部の中心都市ニレジハーザから車で30分ほどの場所にあり、男子の聖バジリオ修道会ハンガリー本部も置かれていて、これらの修道院では、ビザンティン典礼に

1 詳細は拙稿「伝承と国際性—ハンガリーのギリシア・カトリック教会—」筑波大学第二学群比較文化学類学術誌『比較文化研究』第3号、26—36、2007.3 および「2005年度 筑波大学国際連携プロジェクト（長期派遣）報告書「ハンガリーにおける古代学の展開と宗教性の関係をめぐる研究」筑波大学国際連携室 HP <http://khki11.sec.tsukuba.ac.jp/ilo/pro17long.htm>, 2006.1.

2 拙稿「ビザンティンの典礼暦と「光の週」」、『地中海学会月報』310、2008.5.

3 拙稿「聖母の涙—地中海を越えて—」、『地中海学会月報』284.p.6,2005.11.

従った日課による日々の祈祷と、社会的活動が行われている。

ふつうカトリック教会といえば、ローマ典礼に則るローマ・カトリック教会を指すが、中欧から東欧にかけては「ギリシア・カトリック教会」も篤い信徒層を持つ。この共同体は、15世紀から17世紀にかけて断続的に行われた「教会合同」にその起源を有し、1054年に断絶した東西教会の交わりを復してローマ教皇の首位権を認めながらも、典礼や教会法の上では従来のビザンティンの伝承を維持して今日に至り、カトリック教会にとって不可欠の部分をなす。そしてローマ典礼カトリック教会に、ベネディクト会やドミニコ会、フランシスコ会、あるいはイエズス会など各種の修道会が存在するように、ビザンティン典礼に拠る修道会として、ふつう唯一その名が挙がるのが聖バジリオ修道会 (Ordo Sancti Basilii Magni; OSBM) なのである。

本稿は、これまで筆者が続けてきた「ギリシア・カトリック教会」をめぐる研究を継続させる意味で、特にこの「聖バジリオ修道会」の歴史的経緯に焦点を当てて記述するものである。その際、とくにビザンティン典礼に拠る一日の祈祷スケジュールを墨守する彼らが、典礼とその活動とをいかに調和させてきたかを、同会の代表的な人物の活動を辿ることを通して考えてみたい。なお本文中、ギリシア・カトリック教会で現在使用されている「メノロギオン」のハンガリー版を適宜参照し引用することにする⁴。

1. 聖バジリオ修道会の現況

ギリシア教父聖バジル (330-379)⁵による「修道規則」に基づき、カトリック教会の修道会として共住修道制を採る「聖バジリオ修道会」の名の下には次の3種が数えられる⁶。

- 1) イタリア・グロッタフェッラータのバジリオ会 (Ordo Basilianus Italiae; OSBI) ; 1579年設立、ローマ南東部のグロッタフェッラータに本部を置く。

4 「メノロギオン」とは、9月より始まる年間の典礼暦の中で、1年366日(2月29日を含む)の日ごとに記念される各聖人をめぐり、その生涯・活動・聖性の次第等を完結にまとめ、さらに各日固有の祈祷文・唱句などを記載し収録したものである。拙稿「ビザンティン典礼暦から読む旧・新約聖書—古代学の源泉としての「メノロギオン」(1)—」, 筑波大学大学院人文社会科学研究所文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』52, 1-38, 2007.10, およびその続編「ビザンティン典礼暦から読む帝政ローマ/ビザンツ帝国の歴史—古代学の源泉としての「メノロギオン」(2)—」, 筑波大学大学院人文社会科学研究所文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 言語篇』55, 25-109, 2009.3を参照。テキストはMÉNOLOGION, I.(Szeptember 1 - Oktober 2), II. (Oktober 3 - November 20), III. (November 21 - December 17), IV. (December 18 - 31), V. (Január 1 - 27), VI. (Január 28 - Március 10), VII. (Március 11 - Április 30), VIII. (Május 1 - Junius 27), IX. (Junius 28 - Augusztus 5), X. (Augusztus 6 - 31), A „*Dicsérjétek az Úr nevét*” című zsolozsmakönyv tartozéka, Miskolc 1939を用いた。

5 聖大バジルの生涯・教説等については、拙稿「聖バジル典礼における奉獻文の神学的地平—ニュッサのグレゴリオス『人間創造論』解釈に向けて—」, 東方キリスト教会学会誌『エイコーン』第34号, 44-64, 2006.12.

6 „Basiliani” (art.), in: *Dizionario enciclopedico dell' Oriente Cristiano*, a cura di E. G. Faarrugia, Roma 2000ほかを参照。

- 2) 聖ヨシャファトのバジリオ会 (Ordo Basilianus S. Josaphat ; OSBM) ; 1631年設立, ウクライナなど東欧諸国を中心に展開し, 総本部はローマの聖ヨシャファト通り 8 番地. 現在「バジリオ会」と言えば, ほぼこの会を指すことが多い.
- 3) レバノンに本拠を置く 3つのメルキト典礼バジリオ会. a) 至聖なる救い主のメルキト典礼バジリオ会 (Ordo Basilianus Sanctissimi Salvatoris Melkitarum ; BS) ; 1684年設立. b) 洗礼者ヨハネのメルキト典礼バジリオ会 (ソアリタ会, Ordo Basilianus S. Joannis Baptistae Soaritarum Melkitarum ; BC) ; 1697年設立. c) アレッポのメルキト典礼バジリオ会 (Ordo Basilianus Alappensis Melkitarum ; BA) ; 1829年設立.

以下 1) 2) 3) の 3種について簡単な概説を施す.

1) 南イタリアは, 古典古代期以来ギリシアとの交流が緊密でギリシアの植民都市が数多く見られ, ビザンティン時代に入っても東ローマ帝国の一部を形成する時代が続いた. その結果, ビザンティン典礼に拠るキリスト教徒たちが中世を通じて南イタリア地方に多く居住し, 1054年における東西教会の分離以降も, イタリア半島におけるビザンティン典礼の教会として活動を続けた. 下って15世紀, ローマとビザンティン教会の双方が合同を協議した際, その中心人物となったベッサリオン (1403-1472) は, 1439年カトリックの枢機卿に挙げられた後, 1446年イタリアにあるビザンティン典礼修道院の改革に着手した. 当時, その多くは事実上ラテン典礼の修道会に渡っているか, もしくは消滅していた. 彼の後, その努力を継承したサントーリオ枢機卿 (1532-1602) は38修道院をもってこの会を結成させ, 公的には1579年に同修道会が設立された. これにはスペインのバジリオ会が関係していたが, 1866年にはグロッタフェッラータを除き諸修道院が閉鎖された. スペインではラテン典礼による 2つの修道会が聖バジルの修道規則を採用していたが, これらも上述のイタリアのバジリオ会に統合された. 1993年の資料では, 5つの修道院に計55人が起居を共にする.

ちなみに「メノロギオン」には, この会の創始に関わる11世紀初頭の二人の人物が挙がる. 「9月26日 年少の聖生ニルスわれらが師父. グロッタフェッラータ (ローマ近郊, トゥスクルムの野) の聖バジリオ会の修道士たちは, この日に, 会の設立者, 初代の院長として彼を記念する (1005年没) 」「11月11日 新ベルタラン修道司祭. 聖ニルス修道者 (1005没) の同志で伝記作者. ローマ近郊, トゥスクルムの野にあるグロッタフェッラータ修道院において, 11世紀初頭にその長であった」.

2) 彼らの起源は 2人の司教, すなわち聖ヨシャファト・クンツェヴィッチ (1580-1623 ; 1604入会) とヨシフ・ルツキ (1574-1637 ; 1605年入会) の活動に発する. 現在, 普通に「バジリオ会」と言えばこの会を指し, 同会の 3大特質としては「共同生活, 使徒的活動, キリスト教一致促進」が挙げられる. 2000年には93の修道院, 700人の修道士を数え, 本稿ではこれ以降, この修道会出身の修道士・司教たちが登場する.

3) a) ティロとシドンの首府大司教エウテュミウス・サイフィ (1642-1722) の手になる修道会で, 現在は18の修道院に100人ほどの会士を数える. ここからb) が分かれ, 1989年現在, 6修道院に50人の修道士が生活する. さらにc) のアレッポ会が1829年に創設され, 13修道院,

40人の修道士を数える。以上3会は現在レバノンに展開する。

なおバジリオ会のマークは、火の柱を中央に「聖バジルとはこのような人物である」との銘を円環状に配し、その周囲に月桂冠をあしらったものが用いられるが、これは「聖バジルがある夢のなかで、火の柱となって聖エフレム（306-373；シリアの教会博士）に現れた」（メノロギオン、6月8日）とされる伝承に基づくものである。

2. 聖バジリオ女子修道会について

さて上述の聖バジリオ女子修道会（Sorores Ordinis S. Basilii Magni）・マーリアポーチ修道院の一日をここで紹介しよう。朝5時30分 聖堂での黙想 6時15分 朝課⁷ 7時 第1時課 7時15分 聖体礼儀⁸（終了後朝食、その後各自の任務）11時50分 第3、第6、第9時課（任務を中断できないため3つの時課を続けて行う） 12時30分 昼食 13時10分 聖堂にて聖体訪問（特別な意向による祈り〔司教、司祭、修道士、病者、親族、慈善者のため〕；終了後任務に戻る；疲弊の場合は休眠可） 17時 晩課 18時 夕食（終了後自由時間） 20時 終課および夜半課を隔週にて（年老いた修道女が多く、夜半に起きることは難しいが、夜半課を欠かすことは望ましくないため。祈祷後10分ほど霊的黙想、詩篇第90編を唱和；その後相互の赦しあい。終了後自由時間） 22時 就寝。

このスケジュールは、日によって若干の相違はあるものの、基本的に変わることなく維持されていると聞く。修道女たちはこのような祈祷を中心とした日課をこなしつつ、併設された老人ホームの管理運営を行っている。

ハンガリーにおける彼女たちの活動の淵源は、やはりバジリオ会士であったドウダーシュ・ミクローシュ（ハイドワードログ司教区司教、在位1939-1972、後述）が、聖バジリオ女子修道会をハンガリーに招来したことに由来する。その次第を確認しておこう⁹。「彼女たちは聖大バジルの修道規則に則り、彼およびその姉である聖マクリナ（328-380）を崇敬している。彼らの目的は神の讃美、人への奉仕、そして自らの聖化であり、祈り、節食、喜捨の実践によってその実現を目指している。ハンガリーでは、イシュトヴァーン聖王がヴェスプレームの谷修道院の開設に際してギリシア人の修道女たちを住ませた。9世紀から11世紀にかけて、ビザンティンからの宣教活動が行われた際には、ドナウ川河畔の修道院についてわれわれに伝えられている。しかしモンゴルの襲来など歴史の嵐のために、13世紀ごろにこれらは絶えた。その後ビザンティン典

7 拙稿「ビザンティン典礼における「テュピコン」の神学—修道院典礼から司教区の典礼へ—」、筑波大学大学院人文社会科学部研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』53, 53-105, 2008.3.

8 拙稿「ビザンティン典礼による聖体礼儀の神学—聖バジル典礼をテキストに—」、筑波大学大学院人文社会科学部研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』54, 27-81, 2008.10.

9 „Nagy Szent Bazil Rendi Nővérek”, in: *Görög Katolikus Szemle*, Kalendáriuma 2003, 128-130, Nyíregyháza 2002. そのほか Keresztes Sarolta Bazilia OSBM, *Szerzetességünkéről*, Máriapócs 1996 および M. Imre Margit Ágota OSBM (előadó) - Keresztes Sarolta Bazilia OSBM (sz.), *Baziliták*, Veszprém 2007 を参照。

礼修道者たちの活動は再開されたが、第1次世界大戦ののち、それらの修道院—エペルエシュ、フスト、ムンカーチ、ナジボチュコー、ラホーそしてウングヴァール—は、トリアノン条約による国境線から国外に出てしまった。

この事態を受けて、縮小したハンガリーの中でもギリシア典礼に拠る修道女たちが途絶えないように、当時聖バジリオ修道会の管区長であったドウダーシュ・ミクローシュが1935年マリアポーチに修道女を招来した。ここには1941年、巡礼者たちが宿泊にも利用できる施設が建てられた。修道女たちは恩寵教会聖堂の維持管理に当たり、孤児院を建て、教え、ミサ服をしつらえ、社会的活動と青年の活動に携わり、黙想会を企画した。孤児院は1945年からシャートルアルヤウィヘイにも建設され、ハイドウッドログにあつては、バジリオ会の司祭館に師範学校の学生のための女子寮を開設した。共同体は、1950年に国家の手で非合法化され解散したが、このときには24人の会員、4人の志願者がいた。

共産主義は1989年に崩壊し、マリアポーチの女子修道院は人の住めない状態で返還された。建物の修繕には莫大な費用がかかり、共同体は1991年、ここに戻ってきた。1970年代に修道院に加えられた建物や付設施設をこの際に取り、改築を施して、そこには1993年「聖マクリナ老人ホーム」が開設された。これに続いて、1996年にはハイドウッドログにも、それまで休止状態にあった「聖マクリナ老人ホーム」が開かれた。シャートルアルヤウィヘイの修道院の代わりに寄贈された「ドークス館」は1991年に買い取られた。この建物には完全な改築を施し、1997年に「聖アンナ老人ホーム」が開設された。こうして全体で75人の老人のための世話をする体制が整った。現在の活動は、老人の世話、マリアポーチ恩寵教会聖堂の維持管理、典礼具の維持、ボーイ・スカウトや若者向けの活動、霊的黙想会、教会出版物の点検、聖大バジル女子修道会出版部からの定期刊行物の出版である」。

世界全体で見ると、聖バジリオ女子修道会は現在、ローマに本部を有し、11の国（アメリカ合衆国、アルゼンティン、オーストラリア、ブラジル、クロアチア、ハンガリー、イタリア、ポーランド、ルーマニア、スロヴァキア、ウクライナ）に、およそ700人の会員を数える、

3. マリアポーチとバジリオ会士（1）—ビザンツィ・ゲンナディウス司教—

さて、マリアポーチ村のギリシア・カトリック聖堂に掲げられた聖母イコンは、1696年、1715年、1905年の過去3度にわたり落涙している。この聖母イコンの落涙に関しては「メノログイオン」も特記している。

「11月15日 マリアポーチの最初の〈恩寵のイコン〉の落涙の始まり。1696年のこの日（当時の暦であるユリウス暦によれば、11月4日）、聖体礼儀の間に、マリアポーチのギリシア・カトリック小教区教会聖堂において、イコノスタシスの聖母像が落涙を始め、14日間にわたってそれが続いた。その後中断をはさんで12月8日から19日まで聖母の涙が流れた。この落涙は、エゲルの司教座当局が徹底した調査に基づき奇跡として公表した。落涙のイコンは、レオポルト I 世オーストリア皇帝・ハンガリー王（在位1658—1705）がウィーンに移し、現在はウィーンのザンクト・シュテファン大司教座に保管されている。このイコンが移送される前に作

られた複製が、現在のマリアポーチにある〈恩寵のイコン〉であり、その落涙に関しては8月1日に解説がある」。

現在マリアポーチで見られる壮麗なバロック式の聖堂の前身は、簡単な木造の小聖堂であったが、巡礼者が増加してきたため、より大きな聖堂の建設が不可欠となった¹⁰。バジリオ会出身者のムンカーチ司教、ビザンツィ・ゲンナディウス（在位1713-1733）の司教在位期間中の1715年に、第2回目のマリアポーチ・イコンの落涙が起こっている。なお上述のハイドゥードログ司教区とは、1912年にムンカーチ司教区より分立したものであり、ムンカーチ（現ウクライナ領カールパートアルヤ内ムカチェヴォ）は、1920年のトリアノン条約によりハンガリーが大幅に領土を割譲する以前は、ハンガリー領内ギリシア・カトリック教会の精神的故郷となっていた。第2回目の奇跡についても「メノロギオン」は記載している。

「8月1日 いとも聖なる神の母の、マリアポーチ〈恩寵のイコン〉の落涙。1715年8月1日—これは、当時用いられていたユリウス暦に従えば7月25日に当たる—に、聖バジリオ修道会のマリアポーチ聖堂において、イコノスタシス王門の上に掲げられた聖母像が落涙を始めた。このイコンは、1696年11月4日から2週間にわたって落涙したイコンの複製で、最初のイコンは現在ウィーンのザンクト・シュテファン大司教座聖堂の主祭壇にある。この複製〔現在のイコン〕は、最初のイコンがウィーンに移送される際にアバウイメジェのバールツァ小教区で作られたもので、カッサ（現スロヴァキア領コシツェ）から派遣されたイエズス会の画家の手になるものである。この複製における落涙は、教会の精査により確認されて奇跡とされ、1715年8月1, 2, 5日に繰り返された（当時の暦では7月21, 22, 25日）。カントールでマリアポーチの教師であったモルナル・ヤーノシュと、教区司祭のパップ・ミハーイがこの奇跡の幸いなる最初の目撃者であった。落涙の奇跡は1905年にも、12月4日を始めとして数日間に及び、今日でも生存する証言者の目の前で繰り返された。しかしこの後者に関してはまだ公的に奇跡とされていない。もっとも当時のムンカーチ教区の当局の精査は、この落涙に自然現象としての説明はできない、と決定した。われらは幸いなるおとめに、マリアポーチでたびたび、母の善性と力を示して下さるように願おう」。

ゲンナディウス司教は私財を蓄え、1713年にマリアポーチの聖堂の新たな建設を始めた。彼は着工の祝典式のために、自らムンカーチからマリアポーチを訪れた。一方彼は、バジリオ会司祭との間に1732年8月12日、重要な協定を結んでいる¹¹。これは、司教職を修道会から切り離し、ビザンツィの死後、新たな司教は修道院の運営には携わらない一方、会の長上たちは、バジリオ会士たちを、司教の介入なく指導できる、とするものである。この規約の締結に際しては、ビザンツィ・ムンカーチ司教のほか、バジリオ会士であるレオンティウス・スタロスタ、サッバス・ゲラルスキ、プロコピウス・コヴェイチャック、ゲデオン・パツィンが署名した。彼らの

10 以下、Bacsóka Pál, *A Könyvező Máriapócsi Szűzanya csodatevő kegyképe*, 8, Nyíregyháza 1994.

11 Dudás Bertalan – Legeza László – Szacsavay Péter, *Baziliták*, 18 kk., Budapest 1993.

うちパツインが、ビザンツィの死後、ムンカーチ司教から独立してバジリオ会を統括した最初の管区長となった。

ゲンナディウスのあと、オルシャフスキィ・シメオン・イシュトヴァーン（1734）、ブラジョフスキィ・ジュルジュ・ガーボル（1738-1742）、次いでオルシャフスキィ・エンヌエル（1743-1767）がムンカーチの司教座を継いだ。

ムンカーチ・ギリシア・カトリック教区は、当時教会法上はまだエゲル司教区（ローマ典礼）の下に置かれていた。オルシャフスキィ・エンヌエル司教は、司教区の独立のために奔走し、ついにマリア・テレジア（1717/1740-80）より、独立のムンカーチ司教区を作ること、そしてマリアポーチにバジリオ会の修道院を建てることの認可を得た。彼女の仲介により、教皇クレメンス14世（在位1769-74）は、1771年9月19日に発布した勅書Eximia regaliūにより、エゲル司教区から独立してムンカーチ司教区を開設する。他の司教区と同様、その長は王が任命し、司祭団がこれを追認することになり、司教区の正式な初代司教はオルシャフスキィの次代のブラダーチ・ヤーノシュ（1767/1771-1772；オルシャフスキィの甥）であった。司教座は1775年にウングヴァールに移されたが、その司教区名は今日まで、その出自を記念して〈ムンカーチ〉のままである。オルシャフスキィのとき、マリアポーチ聖堂の工事が再開され、1749年の9月8日に現在のマリアポーチ聖堂が落成した。そしてオルシャフスキィ司教が、ムンカーチからマリアポーチへと、初めてバジリオ修道会士たちを招聘する。彼らの名は、ヨアンニキウス・スクリプタ、レオンティウス・スタロスタ、アントニウス・スモリコー、ポニファティウス・グレチュラ、アンブロキウス・テレプツィックであった。上に引いた先の署名メンバーのうちスタロスタは、このようにオルシャフスキィ司教がマリアポーチに最初の修道士たちを遣わした際、その一団に名を連ねている。彼らは、当初は従来の司祭館に起居していたが、1749年に修道院の着工式が行われ、1751年にはその一部が完成してそちらに移った。こうして司教は、恩寵教会聖堂の管理を彼らに委ねた。1752、1754、1768年にはすでに司教叙階式がこの聖堂で行われている。聖堂に現在でも見られる壮麗なイコノスタシスは、1785年から1788年にかけて完成したものである。

4. マリアポーチとバジリオ会士（2）—ドゥダーシュ・ミクローシュ司教—

こうして、マリアポーチのバジリオ会士たちは1950年まで、同村を訪れる巡礼者たちの霊的要請を満たすために働いた。聖バジルの模範に倣い、救霊に努めることがこの修道会の最も重要な目的であった。彼らは若者の教育にも大いに心を砕いた。学校経営とそこでの指導は途絶えることなく行われた。1777年より、修道会の手で中学校がマリアポーチに開かれた。トリアノン条約（1920）の後、マリアポーチの修道院だけが新ハンガリー領内に残ったが、1933年にはハイドゥードログにも修道院が開設された。この年、ドゥダーシュ・ミクローシュがハンガリー管区の初代の長になっている。そして1946年にはマコー、1948年にはキシュペシュトにも修道院が開設された。会の活動の大きな部分を占めるものとして、書物の出版を通しての〈御言葉〉の普及活動があり、師父たちは多くの書物を著した外国語からの翻訳を鋭意行った。1950年

に会が共産主義政権によって解散を命じられた時、ハンガリーのバジリオ会管区には39人のメンバーがいた。だが在俗者の組織として、1953年にはバジリオ会の第3会が新たに開設され、また1964年にはアメリカ合衆国のマタワンに修道院が新設されている。1989年に社会体制が変革を遂げて以降、バジリオ会の共同体もかつての活動を再開させた。現在、その一環としてマリアポーチの修道院の改築が進められている。

世界的に見ると、現在ローマ総本部の下に、ウクライナ、スロヴァキア、ポーランド、ルーマニア、ハンガリー、ブラジル、アルゼンティン、アメリカ合衆国、カナダにバジリオ会の各管区が置かれている。ハンガリー管区は聖イシュトヴァーン管区と呼ばれ、4年に一度管区総会があり、マリアポーチで開かれる。2008年には2月15・16日に行われた。聖イシュトヴァーン管区はハンガリー本国（マリアポーチ、ハイドゥードログ、ブダペシュト；総計7名）と、アメリカ合衆国（マタワン、1963年～；計4名）に修道院を有する。現管区長はソチュカ・アーベル修道司祭である。

20世紀のハンガリー人バジリオ会士を代表する存在として、先に同女子修道院の設立者として挙げたドウダーシュ・ミクローシュ（1902-1972）がいる¹²。彼は1902年10月27日マリアポーチに生まれ、1908年から1912年にかけてバジリオ会が経営する当地の国民学校に通う。1913年から19年までは、ウングヴァール（現ウクライナ領ウジホロド）にあるギムナジウムに通い、その間当地のバジリオ会の学生寮に起居、1920年にバジリオ修道会に入会し、ムンカーチのチェルネックヘジで修練期を経て、1922年に初誓願を立てる。1922年から24年まで、ポーランドにあるバジリオ会のクリスティノポール学院で勉学を積み、1924年にはローマに派遣されグレゴリアン大学で神学の研鑽に励む。1925年にはマリアポーチで終生誓願、1927年に司祭に叙階され、翌年博士号を取得、次いでチェコスロヴァキアのバジリオ会修道院、次いでムンカーチのチェルネックヘジ修道院で修練者の指導にあたる。1932年にマリアポーチの修道院院長となり、翌年には同会ハンガリー管区の管区長となった。1933年にはハイドゥードログにハンガリーで第2のバジリオ会修道院を建設する。この間、ハンガリー、チェコスロヴァキア、アメリカ合衆国に50回にわたり宣教旅行を行った。1935年には上述のように、マリアポーチにバジリオ女子修道会のための修道院を建てている。1939年3月25日、ピウス12世教皇よりハイドゥードログ司教区の司教に任命され、4月7日に教皇認可を受け、5月14日マリアポーチにて叙階される。1939-44年、上院議員を務める。1943年にはストイカ・シャーンドル司教（1890/1932-43）の死没を受け、ムンカーチの使徒座管理者に任命され、また1946年10月14日にはミシュコルツの使徒座管理者となる。1942年にはハイドゥードログに師範学校を、また1950年にはニージェハーザにセミナリウムを建てた。1956年には糖尿病のためにスイスでの療養を必要とし、政府はビザを出す、それはハンガリーに戻ってこないことを期待してのことであった。第2ヴァ

12 cf. Török István Izsák OSBM (sz.), „Egyházamért kész vagyok meghalni”: P. Dr. Dudás Miklós szerzetes-püspök emlékére, Baziliták sorozat, 2005.

ティカン公会議（1962-65）に出席し、ハンガリー語によるビザンティン典礼執行認可が降りたため、1965年11月19日、サンピエトロ大聖堂にて初めての公的聖体礼儀を執り行う。1968年にはハンガリー全土のギリシア・カトリック信徒に対する教会法上の権限を持つようになった。1970年に最初の心臓発作を起こし、1972年に死去している。

ドゥダーシュ司教は、生涯にわたってバジリオ会とマーリアポーチとに心を向けていた修道士であったと言えるだろう。

5. バジリオ会の起源—ヨシフ・ヴェリアミン・ルツキイとヨシャファト・クンツェヴィッチ—

ではここで、バジリオ会（すなわち「聖ヨシャファトのバジリオ会」）そのものの淵源を遡って確認しておこう¹³。その起源は2人の司教、すなわち聖ヨシャファト・クンツェヴィッチ（1580-1623；1604入会）とヨシフ・ルツキイ（1574-1637；1605年入会）の活動に発する。彼らの活動は、キエフ首府大主教座に属するルテニア教会（ウクライナ、ベラルーシ）が、1596年ローマ教会との交わりを回復した「ブレスト・リトフスクの合同」に起源を有している。15世紀の末、東方の諸汗国との抗争からキエフが荒廃し、同市の首府大主教座はヴィリニウス（現リトアニア）にその座を移していた。ヴィリニウスには聖三位一体修道院が建立され、1596年にキエフの首府大司教座がローマとの合同を果たすと、ここが新たに開花した修道生活の中心地となったのである。

後に（1867年）列聖されることになるヨシャファトに関しては、「メノロギオン」に記載が含まれる。以下に引用しよう。「11月12日 ポロツクの司教聖ヨシャファト、司祭殉教者（1580-1623）。高貴なカトリック教徒の両親の許に、ヴォルヒニアのウラジミルスクで1580年に生まれた。家名はクンツェヴィッチであった。若くして聖バジリオ修道会に入り、福音的完徳に励んだ。冬にも素足で歩き、肉は決して食わず、ワインは許された範囲でしか飲まず、常に痛悔の帯を締めていた。彼はまだ若いうちにビテニイの修道院の院長となり、程なくしてヴィリニウスのアルキマンドリトとなり、1619年にはポロツキの大司教となった。正教会教徒を教会共同体に引き戻すべく疲れを知らぬ働きをなし、異端信徒の回心に大いに成功を収めた。貧者に対する援助を惜しまず、オモフォリオンまでも貧しいやもめに贈ったため、すべてに事欠くまでになった。そのカトリック的信仰の篤さと回心を迫る熱心さが多くの敵を作ることになり、ヴィテプスク〔ヴィレプスク〕で司教巡回を行っている際に、彼は正教会の信徒たちに襲撃され、聖堂で襲われ殺されてしまった。1623年11月12日のことである。その遺骸は川に投げ捨てられた。川から引き上げられたとき、全身が不思議な光に輝いていた。彼の墓では非常に多くの奇跡が起こり、教皇ウルバヌスⅧ世は早くも1642年に福者に挙げた。教皇ピウスⅨ世は1867年6月29日に列聖した。レオ13世は1882年、ラテン典礼に彼の記念のための新しい祈祷文を起草した。その遺骸はウィーンのギリシア・カトリック聖ボルバーラ聖堂に安置されている」。

13 全般的に、Puskely Mária, *Keresztény szerzetesség: Történelmi kalauz I-II*, Budapest 1995 を参照した。

一方ルツキィについては、バジリオ会の元総長で、現在ウクライナ・ギリシア・カトリック教会キエフ・ハリチ大大司教区の補佐司教を務めるディニジオ・ラホヴィッツ司教（1946-）による次の文が詳しい¹⁴。「<聖ヨザファトのバジリオ会>は、ヨシフ・ヴェリアミン・ルツキィ首府大司教が設立した。彼にとっての助言者また協働者であったのが聖クンツェヴィッチ・ヨザファトである。ルツキィには、新たな修道会を設立する意図はなかったということを強調しておかねばならない。彼の念願は、源泉すなわち聖バジルへの回帰であって、ルツキィは、修道士たちにとっての規則を定めたバジルを崇敬して止まなかった。ルツキィの伝記を記したラファエル・コルサック（1640没）は、ルツキィがつねに教父たち、とりわけ聖バジルの著作を読んでいたことを特記している。ルツキィは、バジルによる修道生活の使徒的・教会的な性格に魅力を感じていた。彼をひきつけたのは、バジルによる社会的な責務と他者に対する使徒的責任感であって、それはすなわち、教会と兄弟たちのために行われるべき奉仕であった。それゆえ彼の願望は、聖バジルの時代における熱意と献身とを修道生活に取り戻すことであつた。1605年に修道院に入るのを前にして、ルツキィはギリシア典礼教会の衰退を食い止めるための計画を立てた。この計画の中で彼は次のように考えている。<われらの考えは二つの目的から生まれている。学問と、われらの年長者（すなわち司教）たちにおける聖性の欠如を正すことである。司教が修道士たちの間から選ばれるのであれば、もしわれらが善き教会の位階制を望むのなら、われらは聖にして学問を積んだ修道士となることを考えねばならない。修道士たちがその生の聖性と教説のゆえに秀でるとき、かれらは優れた説教者、聴聞者、霊的指導者となるであろうが、これまでそういった人物は現れていない。われらは数多くの学校を開き、そこから優れた教育を受けた教区司祭や信徒たちが巣立つようにしたい。司教や大司教の座を、自らの職務においてどのように振舞うべきかを知っている人々で満たしたい。かくしてわれらは、同じ典礼に属する他の兄弟たちにも助けとなるのだ>」。

1607年、ルツキィはこの計画を実行に移すことに着手する。彼はヴィリニユスの聖三位一体修道院の修道士となり、その後ヨシャファトとともに、修道士たちの新しい世代を育てることに取り掛かった。これに続き、彼はキエフの首府大司教時代（1613-1637）に、「バジリオ会内部の修道会」を建てるため、大いに尽力する。彼の考えは、当時の教養ある人々の考えと同じく、ここに東方典礼のすべての修道士が属すべきだというものであった。1617年に第1回の総会が開かれ、最初の5人によってまたヨザファトによって創設された修道院が、聖バジル修道会の聖三位一体会とされた。このときには、この会は1人の総長と4人の顧問がその運営に当たる、ということが定められた。総会に出席した師父たちは、ヨシフ・ルツキィによって記された規則を認可した。この規則は「われらの師父聖大バジル、カッパドキア・カエサリア司教の一般的規則」と呼ばれている。ルツキィは総会の出席者たちに、規則にこの題名が付されている理由につい

14 P. Dionisio Lachovicz, „A Szent Jozafát Bazilita rend: történelmi kezdé és aktualitás”, in: *Görög Katolikus Szemle, Kalendáriuma* 2003, 35-42, Nyíregyháza 2002.

て、これが聖バジルの著作から生まれたものであるから、と説明している。この同じ総会において、首府大司教と司教は、新しいバジリオ会のこの集会のメンバーのうちから選ばれることが決議された。この特権は1635年にポーランド王ウラディスラフIV世が認可し、王は当時の慣例に従い、司教たちをキエフの首府大司教に完全に従属させる体制を強化した。

以上のように、ルツキとヨシャファトの手で、ウクライナとベラルーシの修道院の内部刷新が進められた。彼らは緊密な協力関係のうちに、イエズス会からの助言を受け、中央集権化されたかたちに修道会の改革を進め、特にキエフから西方の修道院にはこのタイプのものが拡がった。1617年にはキエフで、また1623年にはポロツクにて一般総会が行われた。キエフに建てられた聖三位一体修道院が、バジリオ会にとっての最初の胚胎となった。こうして17世紀から18世紀にかけ、バジリオ会は、ルツキ自身がそう名づけたように「司教たちのセミナリウム」となった。この修道会からは、ほとんど全てのキエフ首府大司教（17人中16人）、およそ60人にのぼる司教、それに首府大司教と司教の許で働く多くの修道士たち（司教代理、聴聞司祭、説教者など）が生まれた。

この聖バジリオ修道会はルテニア教会にとって、文化的にも、司教選出に際しても重要な役割を演じるようになった。第1次世界大戦の勃発に伴って、修道士の多くは北・南米に移住している。

6. ハンガリーにおけるウングヴァールの合同（1646）とパルテーン・ペーテル司教

さて、上で紹介したブレスト・リトフスクの合同（1596）は、カールパートアルヤ山地帯における合同の動きにも影響を及ぼすことになる。この地方の人々がローマとの直接的結びつきを望んだのは、カルヴァン派の土地貴族からこれらの正教会派（大部分は隷僕）の人々に課せられた圧力に対抗するためであった。ムンカーチが、抵抗活動と、それに対する反動の中心地であった。カルヴァン主義者であったラーコーツィ家がこの土地で影響力を発揮する一方、一世紀の間、正教会の聖ミクローシュ修道院が主教館となっていた。

ハンガリーにおける教会合同の時期としては、「ウングヴァールの合同」（1646）がまず挙げられる。この時期のビザンティン典礼教会の主教はタラソヴィッチ（1633-51；1633年にラーコーツィ・ジュルジュ1世が叙階）であった¹⁵。もっとも彼の前任者ヨハンネス・グレゴロヴィッチ（在位1627-1633）もすでに、決定的な合同への歩み寄りには避けていたものの、前章で紹介した首府大司教ルツキとの接触を保っていた¹⁶。グレゴロヴィッチはおそらく、ハンガリーのルテニア系出身であったが、勉学はポーランドのルテニア人の中で修めた。ベトレン・ガーボル（エルデーイ公、在位1613-1629）は、彼の人となりについてこう称讃している。「グレゴリィは、ラテン語初めその他の諸言語に通じ、神学研究の素養を積み、自由学芸の知識

15 以下 Pirigyi István, *A magyarországi görögkatolikusok története* I, 97 kk., Nyiregyháza 1990.

16 以下 Michael Lacko, *Unio Uzhorodensis: Ruthenorum carpathicorum cum ecclesia catholica*, 54f., Roma 1965.

と優れた品格のゆえに余人に抜きん出ている」。このほか前章で引いた首府大司教ルツキも、信仰促進省に宛てた書簡の中で、1628年6月28日、すなわちグレゴローヴィッチの司教叙階後ほどなく、彼に関してこう述べている。「わたしも彼をよく知っている」。しかし1628年一度限りのために「よく知っている」と言うことは考えにくい。したがって、ヨハネスがルツキや他のポーランド在住の合同派と、司教として立てられる以前から関係を保っていたことは確かである¹⁷。

そしてタラソヴィッチは1642年、皇帝フェルディナント三世（在位1637-1657）臨席のもとで、カトリック信仰告白を行っている¹⁸。したがって彼はこのとき以降、それまでの主教座にとどまることはできず、投獄された¹⁹。ところが彼は数年後の1648年、ムンカーチに正教会の主教として戻っている。一方ウングヴァールでは、カトリックを奉ずる領主の庇護の下に合同が準備されていた。こうして1646年4月24日、主教区の63人の司祭が、ウング城内の教会でエゲルの大司教により司式された会議において、合同を受け入れた。これらの一派は、1651年にタラソヴィッチが没すると直に、バジリオ会士パルターン・ペーテル（1592-1664）²⁰を後継者として指名した。パルターンは、タラソヴィッチの存命中は正教徒として認められていたのかもしれない。彼は、正教会派の主教候補ゼイカーン・ヤーノシュの先手を打ち、正教会の信仰告白をしないまま、ルーマニア正教会のジュラフェヘルヴァール首府大主教シモノヴィッチ・イシュトヴァーン（在位1643-1654、その後強制的に廃位）²¹の手で、司教として叙階されてしまった。司教叙階のために必要な他の二司教は、ビストリツァ主教のサヴァと、モルダヴィア主教のグレゴリウスであった。なおもう一方のゼイカーンは、ラーコーツィ家の寡婦ロラントフィ・ジュジャンナの推挙により、1651年に正教の主教として着座している²²。教皇アレクサンデル8世（在位1655-67）は1655年、ペーテルの司教叙階の際の非正当性を認識しつつも、これに寛容を示し、パルターンの司教としての資格を認めている²³。

当時は、司教の推挙・叙任権が誰の手にあるのかが、地方によってまだ確立されていない時期であった。パルターンはこの間隙を縫い、しかもビザンティン典礼に属す修道士として合同派・正教派の両派に通じうる立場を活用し、タラソヴィッチの死没による合同教会派司教の不在という難局を乗り切ったのである。

この地域における、当時のこういった司教任命権の不安定さを見守る意味で、パルターンが没した1664年以降25年間にわたり、教皇庁はムンカーチ司教座を空位のまま座視する。

17 Lacko, *op.cit.*, 55. 合同時のバジリオ会の状況については同書 178 ~ 184.

18 このあたりに関しては、ヘルマン・テュヒレほか『キリスト教史』6, 384頁以下, 平凡社1997年.

19 Mosolygó Marcell, *Krisztus tovább él Egyházában*, Nyíregyháza 1995, 105.

20 Lacko, *op.cit.*, 118.

21 Lacko, *op.cit.*, 125.

22 ヘルマン・テュヒレ, 前掲書 385頁.

23 Lacko, *op.cit.*, 132.

25年後の1689年、ヴァティカンはようやくローマのバジリオ会士デ・カメリス・ヨーゼフ（1641/1689-1703/1706）をムンカーチの司教に指名する。デ・カメリスは教区のローマへの帰順・一致を固め、またこの時期に典礼書のハンガリー語訳を進展させたことで記憶される。こうして17世紀の末にはバジリオ会士たちがムンカーチの司教座を占めたのである。

7. バジリオ会の展開と苦闘—アンドレイ・シェプティツキイ首府大司教—

先に、ギリシア・カトリック教会のムンカーチ司教区建立と、マーリアポーチのバジリオ会修道院建設の認可を下したのがマリア・テレジア（1717/1740-80）であったことを述べたが、彼女の息子であるヨーゼフⅡ世（1741/1765-90）は、1781年に「信仰寛容の布告」を発し、皇帝による啓蒙化政策を押し進め、ローマとの交わりを断絶させることに努めて、修道院の閉鎖と修道女の解放を推進した。1782年教皇ピウスⅥ世（在位1775-99）はウィーンにて信仰寛容の布告に反対し、ヨーゼフⅡ世による啓蒙化政策は失敗に終わる。けれどもこれ以降19世紀を通じて、帝政を敷くロシア領を初めとする地域では啓蒙化政策が進められ、ローマとの交わりを保つバジリオ会にとって、東欧一帯で苦難と沈滞の時期が続いた。その結果としてバジリオ会の改革の必要性が痛感されるようになり、レオ13世教皇（在位1878-1903）は1880年、イエズス会による復興計画を立て、1882年にいわゆる「ドブロミル改革」が始まった。ドブロミルとは、当時志願院がおかれていたガリツィアの都市名である。この改革の影響のもとに、新たな修道・宣教の霊性がバジリオ会士たちを満たすことになった。ドブロミル改革に先立ち、ヴァティカンではバジリオ会の改革に関する特別調査が行われたが、東方聖省は、バジリオ会がより活動的な会となるべきだと判断し、聖ヨシャファトの時代から、聖務のあらゆる面に関して継承された会の霊性、特に幾多の世代のために奉仕してきた青少年の教育に関して、会の偉大な先人たちの足跡に従うべきだと決議した。その後1904年、イエズス会は改革の一定の成果を確認し、ふたたびバジリオ会を彼ら自身に委ねて差し支えないと判断し、改革から撤収した。

一方、この改革がまだ完了していない頃、リヴィウの首府大司教と東方聖省は、バジリオ会士をブラジルへ（1897）、またカナダへ（1902）派遣して、移住ウクライナ人たちの司牧に当たらせるべきだと判断した。こうしてブラジル、アメリカ合衆国、カナダ、アルゼンチンに新しい管区が誕生した。後に第2次大戦以後、ウクライナのギリシア・カトリック教会が社会主義政権により活動停止処分を受けると、バジリオ会は約50年間、公的にはこれらの国々においてのみ活動を続けることになる。今日では、ウクライナ本国でのバジリオ会の活動のために、物的・人的両面における援助がこれら新大陸の管区から続けられている。

さて19世紀の末から、バジリオ会はアンドレイ・シェプティツキイ（1865-1944）とゴイディッチ・パール（1888-1960）という偉大な2人の司教を輩出する。1927年にプレショフの司教となったゴイディッチ・パールについては旧稿で詳しく紹介したため²⁴、本稿ではシェプティツキイについて記すことにしよう²⁵。彼は、上述のドブロミル改革を経験した志願者の中に含まれていた。

シェプティツキイは1865年7月29日に生まれた。1875年からクラクフの聖アンナ・ギュムナ

ジウムに通い、1883年の6月11日に卒業資格を得る。その後も兵役を挟んでクラクフで勉学を続け、1888年に法学博士の学位を得る。ひきつづきブレスラウにて研究を続け、1889年と1890年にはミュンヘンとウィーンで学ぶ。その間1886年にローマへ二度、キエフとモスクワにも旅行している。モスクワでは著名な哲学者、ソロヴィエフと交わっている。1888年の夏、シェプティツキはバジリオ会に入会し、1892年にはクリスティノピルの修道院で終生誓願を立てる。1896年にはリヴィウの聖オヌフリオス修道院の院長となり、ここで教義学と倫理神学を教えた。これと同じ年、長上より、聖バジリオの兄弟会（いわゆる第3会）を組織する認可を得た。1899年、シェプティスキはスタニスラフの司教としてリヴィウで叙階される。その後彼はリヴィウ、スタニスラフ、そしてプジェムシルのセミナリウムにて精力的に職務を果たし、弟子をローマ、ウィーン、インスブルック、フライブルクに送り込んだ。1901年には新しい修道会を建て、1906年、ビザンティン時代の修道士であるストウディオス修道院のテオドロス（756-826）にちなんでこれを「ストウディオス会」と名づけ、ビザンティン典礼の信徒のためのチュピコンを「スクニリフのチュピコン」として編纂し、自らの修道会の規律として用い始めた。スクニリフとは現リヴィウ西部のソキルニキであり、彼は当地の修道院長（アルキマンドリト）としてこの会の指導に携わった。だがこの修道院は1914年に火事で消失し、またその後の第1次世界大戦での神学生たちの応召により、彼の活動は停止を余儀なくされる²⁶。

シェプティツキはハリチの首府大司教・リヴィウの大司教として、国境線を越えて活動することにも努め、1839年に失われた、かつてのハリチ首府司教座を復活させ、正教徒たちをローマとの一致に戻すよう努力した。1907年に彼はモスクワに旅行し、スモレンスクとトリュフオンの司教ピョートルと接触を持った。カトリックに改宗したロシア人の司祭レオニド（レオンティン）・フォードロフの助けを借りて、彼は帝政ロシア内に合同教会を設立しようと考えたが、フォードロフは1914年、彼が到着する前にペテルスブルグで拘禁され、トボルスクに追放されていた。間もなく第一次世界大戦が勃発した。1914年9月15日にはロシアがリヴィウを占領した。シェプティツキは9月18日に捕らえられ、まずクルスクへ、次いでズダリの修道院へ送られ、1917年3月の革命で再逮捕された。釈放後、彼はペテルスブルグへ赴き、フォードロフの釈放を実現させ、1917年5/6月に彼をロシア・カトリック教会の使徒座管理者に指名したが、この組織は1920・30年代のスターリンによる反宗教的テロに破壊された。フォードロフは1935年3月7日、流刑先のヴィアトカで没した。1919年リヴィウはハブスブルク体制の崩壊によりポーランド領となった。新しい支配者は、合同教会のうちにウクライナの民族主義を見て取ったため、

24 拙稿「スロヴァキアの春—『東方教会法典』の規定と現代の「殉教者」たち—」, 筑波大学人文・文化学群比較文化学類学術誌『比較文化研究』第4号, 49-65, 2008.3.

25 以下 "Szeptyckyj" (Art.), in: F. W. Bautz (hrsg.), *Biographisch-Bibliographisches Kirchenlexikon*, Hamm, Westf., 1996. ほかにヨセフ・ハヤールほか『キリスト教史』11, 359頁以下, 平凡社1997年.

26 以上 Ruszinkó Szergej, „A sztudita szerzetesi rend kialakulása”, in: *Velünk az Isten! Emlékkönyv Keresztes Szilárd püspök 70. születésnapjára a kispapoktól*, 37-40, Nyíregyháza 2002.

シェプティツキを1919年1月より長期間にわたって自宅軟禁とした。1921年彼はローマに旅行し、アメリカ合衆国にも足を伸ばした。帰国に際して彼は1923年9月26日チェコスロヴァキアとポーランドの国境で、ポーランド当局により捕らえられ、ポズナニにしばらく抑留された。ポーランドとヴァチカンとの協約により、ハリチの首府大司教は、その教会法的権限をポーランド領内に制限されることになった。ブコヴィナ地方は長らくスタニスラフ司教の権限下にあったが、マラムロシュ・ルーマニアカトリック教会の下に入ることとなった。1920・30年代を通じ、ポーランド政府はヴォルフュニとポレジの正教会を手放した。これらの教会は19世紀には合同教会の首府大司教の下にあったが、復帰せず、ローマカトリック化された。シェプティツキによりこれらの領域に立てられたヨシフ・ボチャン・フォン・ルック司教は、ポーランド当局より越権者と判断され、リヴィウへと送還された。ポーランド政府は1938年、正教会に対して114の聖堂を破壊した。これに対して、シェプティツキは1938年3月20日公然と抗議し、信徒たちには自らの伝統に留まるよう説得した。これはポーランド政府からの支持は得られなかったものの、教会破壊は収まった。赤軍がベラルーシとガリツィアを占領するに至って合同教会は新たな苦境に立たされることになった。この赤軍は、1939年9月17日以降、ヒトラー・スターリン協約によって成立したものである。ソヴィエト当局は修道院を閉鎖し、宗教教育を禁じ、大司教座より印刷機器を奪い取ったため、リヴィウの司祭たちは首府大司教の勅書を手書きで配布した。既に40人の司祭は当局に捕らえられ、100人以上はガリツィアから脱出していたが、シェプティツキはなお信徒たちの救霊に努めるだけでなく、1939年以前からソヴィエト領となっていた地域に合同教会を立てる試みを行い、イエズス会士アントニイ・ニーマンツェヴィッチをベラルーシ使徒座管理者に、その弟であるクリメンティイをロシア使徒座管理者に指名した。1940年5月には彼は司教総会を司教座で開いた。ドイツ軍がリヴィウとガリツィアを1941年に占領したことは幾許かの希望をもたらし、アンドレイ・メルニクとヤロスラフ・ステツコラによるウクライナ独立国の設立の試みの際に、シェプティツキはこれを支持した。だが結局ガリツィアはポーランド政府の支配下に入り、ウクライナの他の地方は東プロシアの下に入った。1944年の夏ガリツィアはソヴィエト軍によって奪還されてしまった。シェプティツキは1944年11月1日に没し、正教会が典礼を維持したままローマに一致するという彼のビジョンはついでた。

彼の死後、西ウクライナ地方における合同教会のモスクワ総司教座下への強制移入が実行に移された。ソヴィエトによる西ウクライナ地方の占領の間（1944-1989）、合同教会は地下にのみ生き残った。彼らの権利の回復が行われたのは1989年のことである。

8. スラヴ圏へのキリスト教宣教とキエフ・ルーシの修道院

以上、本稿ではマーリアポーチに本拠を置くバジリオ会ハンガリー管区の活動から出発し、マーリアポーチと縁の深いビザンツィ・ゲンナディウスとドウダーシュ・ミクローシュ両司教を起点に、同会の創設者聖ヨシャファトとルツキ大司教、ハンガリーにおける合同期の司教パルテン・ペーテル、そして20世紀前半のウクライナにおけるシェプティツキ首府大司教の苦闘までを辿ってきた。彼らの活動を通じ、司教が独身者から選出されるという条件の中で、司祭

の独身制を課すローマ・カトリックとは異なり、司教候補者がほぼ修道司祭に限定されるギリシア・カトリック教会にあって、当初より卓越した司教を輩出することを目的として発足した聖バジリオ修道会が、典礼を基盤とする修道霊性と社会的活動の両面において同教会をリードしてきたという事実が浮き彫りになったと言えるだろう。いま、さらに彼らの淵源を探るべく、スラヴ圏にビザンティンのキリスト教が伝えられた中世にまで遡って論及する必要がある。

ハンガリーで使用されている「メノログイオン」には、ルテニア経由で成立したハンガリーのギリシア・カトリック教会の淵源を反映して、スラヴ人の聖人たちの記念日が特記され付加されている。それらは1054年の東西教会分離を考慮し、これと齟齬を来さないように取り込まれていて、東西分離以前のビザンティンの伝承がキエフ経由でハンガリーに移植されたことを辿れる仕組みになっている。まず次に挙げるのは「キリル文字」²⁷にその名を遺す聖キュリロス（キリル）と、その兄弟メトディオス（メトード）の伝記である。

「7月7日 聖生のキュリロスとメトディオスわれらの師父、スラヴ民族の使徒。二人は兄弟で、どちらもコンスタンティノポリスの修道士であり、われらの国土とその周囲に住むスラヴ人・ブルガリア人の回心を願ひ、そのための委任を取り付けた。聖キリルは、元来コンスタンティンという名であったが、後に病に罹り、誓願によりキリルと変更した。二人ともサロニキに、キリルは827年、メトードは813年に生まれた。メトードはビザンツ帝国のスラヴ区域の行政官であり、弟は哲学者であった。後に二人とも修道士となり、メトードは小アジアのキュズィケの修道院の長上となった。860年にキリルは、聖イグナツ総司教の勧告により、アゾフ海とカスピ海の間広がるカザール帝国に宣教者として赴いた。その途上、ハンガリー人とも接触があった。ロシア人の間でも使徒的活動を行った。メトードも援助に駆けつけた。863年にはラティスラフの懲慥により、モラヴィア人のもとに赴き、次いでブルガリア人をも訪ねた。スラヴ人と、スラヴ語で話すブルガリア人のために、聖書と典礼書とを、完璧な逐語訳によってスラヴ語に移し、これをもって、当時のスラヴ語を、古典的美しさを伴ったものに発展させた。ギリシア語とラテン語の字母から、彼らの名をもって呼ばれる<キリル文字>と呼ばれるスラヴ語の字母を開発し、奉神礼をスラヴ語で執り行い始めた。これをドイツの司教たちが誹謗したために、聖キリルは自らローマに赴いた。この件が決着した後、彼は869年、ローマで42歳にして没した。聖メトードはパンノニアとモラヴィアの大司教としてローマから戻り、活動を続けた。彼はモラヴィアのヴェレフラドにて没し（885年）、現在でも当地に彼の遺骸が保管されている。彼らの記念はラテン典礼でも今日（7月7日）行われる」。

この他にも、2月14日には「聖生のキリルわれらが師父」のための、また5月11日には「聖メトード、モラヴィアとパンノニアの大司教」のための記念日が設けられている。結局彼ら兄弟の宣教活動は、キリル文字の開発とスラヴ語典書の蓄積という偉大な功績を築いたものの、実質的な成果としてはブルガリア人の改宗という成果のみにとどまったと言える。次の記念日はこれに

27 cf. 拙稿「古代教会スラヴ語の魅力」,「地中海学会月報」239,p.4,2001.4.

関わる。

「5月2日 聖ボリスないしボルゴリス、ブルガリアの初代国王（843-888）。聖メトディオスの勧めにより、866年にキリスト教信仰を受け入れ、洗礼の際にミハーイという名を得て、自らの国民をほとんどすべてキリストの教会に移した。〈フォティオスの離教〉の際、彼とともにあることを望まず、教皇ミカエル1世に宛てて使者を遣わした。教皇は867年の親書の中で、ブルガリア人がローマ教会とともにあることを、讃美をもって称揚している。国民が回心し、国家がオフリドの大司教と7人の司教のもとに組織された後、王位を辞し、修道院に入った」。

一方ロシアの皇女オルガ（890-969）は、コンスタンティノポリスへの旅の際に受洗し、孫にあたるウラディーミル大公（956-1015）によるキリスト教招来を準備することになる。

「7月11日 祝されたオルガ使徒。ロシアの皇女で、聖ウラディーミルの祖母。24年間の統治の後、コンスタンティノポリスに赴き、957-958年に複数の臣下たちとともに当地にて洗礼を受けた。この際、総司教聖ポリエクト〔在位956-970〕よりイロナという名を受けた。故国に戻り、キリスト教教会のための熱心な布教者となった。90歳にして969年に没した」。

そのウラディーミルには、7月15日が祝日として当てられている。

「7月15日 洗礼の際にバジルと名づけられた聖ウラディーミル、大公にして准使徒。聖ウラディーミル（ハンガリー語でアラダール）は祖母の聖オルガがキリスト教信仰へと教え導き、ミクローシュII世・クリュソベルガ・コンスタンティナポリ普遍総司教（982-995）によって叙階されたロシアの最初の総司教、キエフの主教ミハーイが988年に洗礼を授けた。コンスタンティノポリスの皇帝であるバジル（II世）およびコンスタンティン（VIII世）の姉妹であるアンナと結婚し、大いなる熱意をもって国家の回心に心を砕いた。1015年に没した。二人の息子すなわちボリスとグレブも、ともに程なく教会が聖人の位に挙げた。ロシアは、ケルラリウスによる1054年の教会分離にともなう東方の離反以後も、長きにわたり教会の忠実な子であったが、このことは、グレゴリウスVII世教皇がイザスラウス・デメテル皇帝に宛てた書簡においても明らかである。キエフにある、いとも聖なる神の母の聖堂に彼の遺骸が安置されているが、この聖堂はウラディーミルが建てたものである」。

ウラディーミルの二人の子、ボリスとフレブにも聖人の称号が与えられている。

「7月24日 聖ボリスとフレブ殉教者、聖なる洗礼の際にロマーンおよびダーヴィドという名を得た者たち。聖ウラディーミル（ウラディーミル）ロシア大公と、コンスタンティノポリスの皇女アンナの子供たちで、兄弟である。スヴァトポルクにて1015年、キリスト教徒であるという理由で非道にも殺された。聖ボリスは6月24日に、聖フレブは9月5日に没した」。このほか5月2日が「聖ボリスとフレブの遺骸の移送」のために当てられている。

キエフ・ルーシに関しては、ウラディーミルからヤロスラフ賢公（978/1015(9)-1054）の時代がその最盛期だといえる。ヤロスラフ賢公は、キエフに1037年聖ソフィア寺院を建立し、コンスタンティノポリスに拮抗する東欧の都とした。ウラディーミルがビザンティン皇帝の義理の弟であることから、彼によるルーシ（＝ルテニア）統治以降、ルーシはコンスタンティノポリス直轄の教区であったという見解が現在では定説となっている²⁸。これ以降1441年まで、コンスタ

ンティノポリスの管轄下にある「キエフおよび全ルーシの首府大司教」がキエフを拠点とすることになる。ヤロスラフが1051年ルーシの司教イラリオンをキエフの首府大司教に任命して以降、ここにはルーシ出身者が座を占めた。一方スラヴ語典礼はキュリル・メトディオス起源であり、ブルガリアからもたらされたと考えられるが、それは1018年の第1次ブルガリア帝国滅亡後にブルガリアの聖職者がロシアに亡命して以降のこととされる。それとともにこの11世紀以降、修道生活の聖なる指導者たちが、ロシア、ウクライナ、ベラルーシへの福音宣教のために尽力することになる。その中心となったのは、やはりキエフにある「洞窟修道院」であり、二人の聖人を輩出した。「メノロギオン」を参照しよう。

「7月10日 キエフの洞窟修道院のアンタル師父。生まれに関してはロシア人であるが、修道衣はギリシアのアトス山にて1012年に身にまとった。1051年に故国に戻り、大ウラジーミル公の許、キエフ近郊で痛悔の生を送る者たちを組織し、1062<洞窟修道院>と名づけられた修道院に集めた。この業にあって同志となったのは、弟子の聖テオドーズである。洞窟にて26年間を過ごした後、90歳で1078年に没した」。「5月3日 キエフの洞窟修道院のテオドーズ師父。聖アンタルとともにロシアの修道生活の創始者となり、キエフの近郊に修道院を建て、1062年、これを洞窟修道院と名づけた。1074年に（別説では1067、1082年に）その長となり篤信の死に到るまで長を務めた。5月3日はその記念日である。師の聖アンタルの記念は7月10日に行われる」。

このテオドーズには、8月14日にも「崇敬に値するわれらの師父テオドーズ洞窟修道院長修道司祭の遺骸移送」の祝日がある。「フセヴォロード大公とヤーノシュ洞窟修道院長が、聖人の遺骸を1091年に洞窟から、聖テオドーズ自らが建立した聖母の聖堂に移した」。

テオドーズは、1025年から1043年にかけてコンスタンティノポリスの総司教を務めたアレクシスの編纂になる新たな総合的「ストウディオス・テュピコン」を翻訳し、全ルーシに広めたとされる²⁹。このアレクシスは、ほかならぬストウディオス修道院の出身であった。このように全スラヴ圏の修道霊性はキエフへと遡源し、その修道規律は9世紀のコンスタンティノポリス・ストウディオス修道院における規律へと遡るのである。

下ってタタール人の襲来（1240年）は、東欧全域に壊滅的な打撃を与え、キエフから西方に勢力を誇っていたビザンティン典礼修道院もこの折に荒廃した。この頃のスラヴ人の聖人として、「メノロギオン」には聖ピロシュカが挙がる。

「10月28日 ポロツキの聖ピロシュカ（ないしパラスケーヴァ）殉教女。ポロツキの聖ピロシュカは、ルテニア人のバジリオ会女子修道院の修道院長であった。タタール人の急襲に先立ちローマに逃れ、ここで聖なる仕方です1239年に没した。教皇ゲルゲイ10世が1273年に聖人の位に挙げた」。

28 A. Papadakis, *The Christian East and the Rise of the Papacy*, 322, Crestwood, NY., 1994.

29 R. Taft, *The Byzantine Rite: A Short History*, 59, Collegeville, Minnesota 1992. ほかにセルゲイ・ボルシャコフ（古谷功訳）『ロシアの神秘家たち』57-58, あかし書房 1985年。

一方、その後ガリツィアとベラルーシに再建された修道院は、1384年ポーランド・リトアニア連合国の支配化に入った（両国は1569年のルブリン合同で正式に合体する）。この頃のリトアニアの殉教者も「メノロギオン」に収録されている。

「4月14日 聖アンタル、ヤーノシュおよびエウストラート殉教者。リトアニアのヴィリニュスにて信仰のため1342年に殉教した」。

このリトアニアの霊性が、下って17世紀、ルツキヤやヨシャファートの手で受け継がれる次第については、すでに確認したとおりである。こうしてバジリオ会の霊性源泉は、同会がその名に頂く聖バジルもさることながら、ビザンティン典礼の修道院運営に関する「テュピコン」を規定したストウディオス修道院のテオドロスのうちに求められる。そしてこれは、シェプティツキヤが新たに創設した活動団体を「ストウディオス会」と命名したことに象徴されるように、20世紀になって再認識される同会の本質的側面ともなっているのである。

結. バジリオ会の意義

本稿では、設立以来、ビザンティン典礼カトリック教会の要職を占めてきたバジリオ会修道士たちの歩みを、主として司教経験者の人物像を中心に辿ってきた。ハンガリーにあっては、マリアポーチの「落涙の聖母イコン」を中心にして、現在なお男子・女子バジリオ修道会の活動が継続されている。そこで行われる祈りは、11世紀にキエフ・スラヴ圏へと伝えられたものに遡る式次第に基づくものであり、さらにはストウディオス修道院へ、また聖バジルその人へと淵源して、ビザンティン典礼の修道士・信徒たちを日々聖化してきた道であった。

現行のビザンティン典礼の基本的構造は、おそらく9世紀初頭に遡ると言われる。バジリオ会士たちは、かつてストウディオス修道院のテオドロスがそうであったように、聖バジルへの遡源を理想に掲げ、東西がまだ対立を知らなかった教父時代の再現を目指してきた。バジルを理想に掲げるといふ点でテオドロスに倣うとともに、テオドロスを理想に掲げた初代キエフ・ルーシの洞窟修道院の修道士たちとも彼らは一致する。ルテニア人を中心とし、ビザンティン・カトリックの霊性を伝える彼らバジリオ会士たちこそ、キエフ・ルーシの真の後継者であり、かつ9世紀初頭の典礼実践を通して直接古典古代の完成期へと遡源する彼らこそ³⁰、初代キリスト教の霊性を今日へと忠実に伝える共同体であることが、本稿によって確認できたと考えたい。

30 ビザンティン9世紀に始まるマケドニア朝ルネサンスの意義については、拙著『教父と古典解釈—予型論の射程一』、創文社、2001.2.